

原著論文

大学図書館が実施する「学士課程学生による研究」に対する
支援の実態と特徴：北米の研究大学図書館を対象とする
質問紙調査とインタビュー調査から

Actual Conditions and Characteristics of Academic Library Services for Undergraduate Research: A Survey and Interviews of Research Libraries in American and Canadian Universities

新見 槿子
Makiko NIIMI

Résumé

Purpose: This paper examines the actual conditions and characteristics of academic library services for undergraduate research in the United States and Canada.

Methods: A questionnaire survey was conducted on 133 research university libraries that were selected as research objects. Invitations to participate in a web-based questionnaire survey were sent to the librarians of these institutions by e-mail. The duration of the survey period was October–December 2014, and the month of March in 2015. The interviews were conducted with six libraries. The e-mail interviews were conducted with four libraries in March and April 2015. The face-to-face interviews were conducted with two libraries in May 2015.

Results: The total number of libraries that responded to the questionnaire was 30. The numbers of libraries offering each type of service are as follows: 30 libraries support courses that promote undergraduate research, 28 libraries support honors programs or honors students, 19 libraries support the undergraduate research opportunities program, 16 libraries are involved in the undergraduate research symposium, 9 libraries publish or support the publication of undergraduate research journals, and 14 libraries offer library research awards to undergraduate students. Many libraries collaborate with faculty, and several libraries collaborate with other units, such as the undergraduate research office and the honors program office. The results of the interviews clarified that promoting undergraduate research is considered one of the principal goals in universities, and that libraries recognized support for undergraduate research as an important service that is based on the university's policy.

新見槿子：東京大学附属図書館

Makiko NIIMI: University Library, University of Tokyo

e-mail: niimi.makiko@mail.u-tokyo.ac.jp

受付日：2017年3月20日 改訂稿受付日：2017年6月25日 受理日：2017年10月8日

- I. 研究の背景と目的
 - A. 高等教育における「学士課程学生による研究」の動向
 - B. 大学図書館における動向と先行研究
 - C. 本研究の目的と構成
 - D. 「学士課程学生による研究」に対する支援のためのサービスの類型
- II. 北米の研究大学図書館における「学士課程学生による研究」に対する支援の実態調査
 - A. 質問紙調査
 - B. 訪問ないしメールによるインタビュー調査
- III. 「学士課程学生による研究」を支援するためのサービスの現況
 - A. 大学図書館におけるサービスの実施状況
 - B. 大学図書館におけるサービスの実施体制
 - C. 大学図書館と大学におけるサービスの位置づけ
- IV. 「学士課程学生による研究」に対する支援の特徴
- V. 本研究の成果と今後の研究課題

I. 研究の背景と目的

A. 高等教育における「学士課程学生による研究」の動向

学士課程学生が能動的に学べるようになることを目的とした、学士課程教育改革の議論が行われるようになって久しい。そのような議論を背景として、北米の大学において「学士課程学生による研究 (undergraduate research)」¹⁾を促進するための取り組みが活発に行われている。「学士課程学生による研究」とは、学生が様々な形態によって取り組む研究や探究のための活動とそれを通じた学習を示す概念であり、学士課程教育改革の手段の1つとして位置づけられている。

著者の前稿²⁾においてその経緯を述べている通り、「学士課程学生による研究」は、大学における教育と研究を結びつける試みであり、その概念がアメリカの研究大学の取り組みから生じた後に、アメリカ国内の他のタイプの大学でも広まっていき、現在では北米にとどまらず他国にも波及している。発祥の地とされているアメリカでの歴史的経緯を簡潔に述べると、その嚆矢は、1969年にマサチューセッツ工科大学が開始した「学士課程学生研究プログラム (undergraduate research opportunities program)」であると言われている^{3)~6)}。1978年には、全米組織である学士課

程学生研究協議会 (Council on Undergraduate Research)⁷⁾が発足した。1980年代になると、全米科学財団 (National Science Foundation) が「学士課程学生による研究」を助成するプログラムを開始した。1998年には、カーネギー教育振興財団ボイヤー委員会 (Boyer Commission) が、『学士課程教育の再編：アメリカの研究大学のための青写真』 (*Reinventing Undergraduate Education: A Blueprint for America's Research Universities*)⁸⁾を発表した。『学士課程教育の再編』は、学士課程教育が重視されない傾向にある研究大学に対して、その卓越した研究活動と環境を活かした学士課程教育改革の方法を提言した文書である。そのなかでも、学士課程教育において“研究に基づく学習を標準にする (Make Research-Based Learning the Standard)”⁸⁾ということを提言した点が大きな特徴であった。この文書は、研究大学において「学士課程学生による研究」が広まる際に大きな役割を果たしたと言われている⁹⁾。

2000年代以降になると、「学士課程学生による研究」に対する関心はさらに高くなっていった。たとえば、高等教育における学生を対象としたアセスメントの研究では、George D. Kuh¹⁰⁾が、初年次セミナーやラーニングコミュニティ等とともに、「学士課程学生による研究」を「高

い効果のある教育実践 (high-impact educational practices)]¹¹⁾の1つとしてあげている。Kuhは、2000年に開始されたNational Survey of Student Engagement (NSSE)¹²⁾という学生調査のディレクターを創設時に務めていた。このNSSEとともに広まった概念である、「学生エンゲージメント (student engagement)」を促進する要素の1つとしても、「学士課程学生による研究」が捉えられるようになってきている⁴⁾¹³⁾。現在では、「学士課程学生による研究」は、学生の学びや専門分野への関心を呼び起こし、学生のリテンション率や卒業率を向上させ、学生生活の成功や卒業後の大学院での成果にも良い影響を与えるとされている¹⁴⁾。なお、溝上慎一によると、「学生エンゲージメント」とは、“大学が提供する教育的な場や機会が学生の学習や個人的な成長を促す、という考え方のもとで進められている学生アセスメントや教育実践の技術・デザイン開発の総称”¹⁵⁾のことである。また、NSSE以外の学生調査でも「学士課程学生による研究」に関わる項目が取り入れられている。たとえば、研究大学における「学生の経験 (student experience)」を測定する学生調査である、Student Experience in the Research University Survey¹⁶⁾には、“学業との関わり、学生としての生活、キャンパスの風土、個人属性等”¹⁷⁾に関する質問があり、学士課程学生向けの質問のなかに、研究活動・研究体験への参加、学生と教員の相互交流といった項目が含まれている。

「学士課程学生による研究」は、厳密に定義された言葉というよりは、様々な活動を含む包括的な言葉であるとされている³⁾。しかし、全米組織である学士課程学生研究協議会による定義が、北米において代表的なものとして言え、本稿で引用する文献の多くで言及されている。学士課程学生研究協議会では、「学士課程学生による研究」を、“学士課程学生によって実施され、専門分野に対して独自の知的もしくは創造的な貢献をする探究や調査”¹⁸⁾と定義しており、同協議会のウェブサイトには“研究を通じた学習 (Learning through research)”⁷⁾という言葉が掲載されている。また、Shouping Huら⁴⁾は、現在

の「学士課程学生による研究」の概念と活動は、構成主義学習理論を背景としており、経験学習や課題解決型学習、探求型学習、サービスマーケティングといった学習モデルの影響を受けていると説明している。なお、学問分野としては、当初は自然科学分野から始まった取り組みであるが、現在では人文科学・社会科学・芸術活動など全ての分野を含んでいるとされている¹⁹⁾。

このような「学士課程学生による研究」を実現する方法としては、学士課程教育の正規課程の授業のなかに研究活動・研究体験を導入する方法、学士課程学生研究プログラムといった名称で実施される特別な教育プログラムのなかで、希望する学生や選抜された学生に対して研究活動・研究体験の機会を提供する方法の2つに大きく分かれる²⁰⁾。また、授業内外で学士課程学生が取り組んだ研究成果を発表する機会を提供するために、学内で研究成果発表会の開催や研究論文誌の刊行が行われることもある。さらに、研究助成金の支給や優れた研究を行った学生に対する表彰が行われることもある⁴⁾¹⁹⁾²¹⁾。

組織的な面からの実現方法としては、文献⁴⁾¹⁹⁾や学士課程学生研究協議会の文書²²⁾において、以下のような事項があげられている。まず、「学士課程学生による研究」を学内で浸透させていく際には、大学全体の使命や方針、戦略計画のなかに「学士課程学生による研究」の促進が含まれていることが重要な要素になると言われている。さらに、財政的な枠組みのなかに「学士課程学生による研究」が組み込まれていることも必要であると指摘されている。そして、大学によっては、「学士課程学生による研究」を管轄する部署や役職が設けられていることもある。

なお、北米において「学士課程学生による研究」がどの程度浸透しているのかを見るにあたっての手掛かりの1つとして、上述のNSSEにおける「高い効果のある実践 (high-impact practices)」という指標がある。これは、大学入学から卒業までに「高い効果のある実践」に含まれる事柄に取り組む予定、または取り組んだ経験がある学士課程学生の割合を算出するものであ

る。初年次向けの「高い効果のある実践」の指標の1つには「教員と一緒に研究に取り組む」という項目があり、最終年次向けの指標には「教員と一緒に研究に取り組む」「最終年次の経験に取り組む（大学での学びの総まとめとしてのキャップストーン科目、最終年次の論文やプロジェクト等）」という項目が含まれている²³⁾。2016年のNSSE²⁴⁾では、アメリカの512大学とカナダの25大学に在籍する約30万人の学士課程学生が回答している。このうち、アメリカの学生の回答結果によると、「教員と一緒に研究に取り組む」は初年次学生の5%、最終年次学生の24%が計画中または経験済みであった。また、「最終年次の経験に取り組む」は、45%の学生が計画中または経験済みであった。上記の結果より、北米では、ある程度の学生が「学士課程学生による研究」に参加していると言えるだろう。

B. 大学図書館における動向と先行研究

A節で取り上げたカーネギー教育振興財団ボイヤー委員会による『学士課程教育の再編』⁸⁾には、“研究大学では、図書館、ラボ、コンピュータ、スタジオ等における探求を促進しなくてはならない”⁸⁾という記載があり、学士課程学生研究協議会による文書²²⁾では、「学士課程学生による研究」を促進するための要素の1つとして、大学図書館が提供する資料や資源、情報リテラシーや研究スキルを向上させるための支援が例示されている。

近年では、北米の大学図書館について取り上げた文献のなかに、上記の文献⁸⁾²²⁾を引用し、「学士課程学生による研究」と大学図書館の関係を論じるものが、数はまだ少ないながらも存在するようになっている。つまり、「学士課程学生による研究」に対する支援が、大学図書館の新たな役割として見なされるようになりつつあると考えられる。

北米における各大学図書館の事例を取り上げた文献としては、図書館・情報学分野の雑誌で発表された、アメリカとカナダの大学図書館による事例報告^{25)~29)}がある。これらの事例報告では、図書館単独ではなく、教員や図書館以外の他部署との協働で実施した取り組みが扱われている。ま

た、学士課程学生研究協議会の機関紙で発表された、サウスフロリダ大学における図書館とOffice for Undergraduate Researchの協働プロジェクトの事例報告³⁰⁾もある。

著者は、2014年に発表した前稿²⁾において、授業における「学士課程学生による研究」に対する支援に着目することの重要性を指摘したうえで、カリフォルニア大学バークレー校において教員と図書館の協働によって実施されたプロジェクトである、「Mellon Library Faculty Fellowship for Undergraduate Research」を対象とする事例分析を行っている。このプロジェクトは、授業のなかに研究活動・研究体験を導入することを目的として、図書館が中心的役割を担う形で実施されたものである。

上記のような各大学の個別事例ではなく、複数の大学を視野に入れてサービスの実態を俯瞰的に見た研究となると、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校図書館のMerinda Kaye Hensleyらが2014年から2015年にかけて発表した、一連の実態調査^{31)~33)}が目立つ程度である。Hensleyらは、正規課程の授業以外で行われる「学士課程学生による研究」のための教育プログラムやイベント等の取り組みを対象として、それらに対する大学図書館の支援についての質問紙調査を行っている³⁴⁾。

Hensleyらによる大学図書館を対象とした質問紙調査³¹⁾では、調査対象758館のうち281館が回答している。その結果によると、親機関である大学において、正規課程の授業以外で「学士課程学生による研究」のための取り組みが行われていたのは、回答館の85.4% (240館)であった。そのうち、165館では図書館でもそれらに対する支援が行われていた。個々のサービスのなかでは、情報リテラシー指導の実施率が最も高く、141館で実施されていた³⁵⁾。また、サービス実施館には、「学士課程学生による研究」のための教育プログラム等への支援を職務の1つとしている図書館員も存在しており、彼らは「学士課程学生による研究」を管轄する部署のリエゾン担当者やサブジェクトライブラリアン、情報リテラシーを担当する図書館員等であった。さらに、サービス実施

館の35.8%では、図書館外の「学士課程学生による研究」に関する学内委員会に、図書館員が参加していた。

なお、上記調査で最も実施率が高かった情報リテラシー指導については、別途の質問紙調査³²⁾も行われている。調査対象133館のうち70館の回答結果によると、65館(92.9%)で「学士課程学生による研究」のための教育プログラム等において情報リテラシー指導が行われていた。分野別では、社会科学(37館)、人文科学(29館)、学際プログラム(27館)の実施が多いという結果であった。取り扱う内容としては、データベース検索、キーワード検索や主題検索等の検索スキル、文献管理ツール等が多いという結果であった。

そして、Hensleyらが「学士課程学生による研究」を管轄する部署の担当者に対して行った質問紙調査³³⁾では、調査対象758人のうち304人が回答している。その結果によると、学内の図書館による支援の実施あるいは計画を認識していたのは149人であった。138人は、図書館は「学士課程学生による研究」において重要な役割を担っていると考えていた。

これらの先行研究では、大学図書館が実施する「学士課程学生による研究」に対する支援に関して、十分には明らかになっていない点がある。まず、Hensleyらも指摘しているように³¹⁾、各大学図書館の個別事例の報告や分析では、「学士課程学生による研究」の動向の全体像を俯瞰的に見ることができない。その点では、Hensleyらによる一連の実態調査は、質問紙への回答数も多く、大学図書館が実施する「学士課程学生による研究」に対する支援の現況を知る際に多くの示唆を与えるものである。しかしながら、彼らは調査対象から正規課程の授業を除いており、それ以外の教育プログラムやイベント等のみを調査対象としている。A節でも述べたように、大学において「学士課程学生による研究」を実現する方法として、正規課程の授業における取り組みも例示されている。著者による前稿²⁾でも議論している通り、大学図書館による支援を見る際には、希望する学生のみが参加する教育プログラム等だけでな

く、多くの学生を対象とする授業における支援も視野に入れる必要があるだろう。

さらに、Hensleyらは、正規課程の授業以外で行われる「学士課程学生による研究」のための教育プログラム等という大きな括りでの調査を行っており、個々の教育プログラム等に対して、どのような支援を大学図書館が実施しているのか、個別には調査していない。言い換えると、「ある特定の教育プログラム、たとえば、学士課程学生研究プログラムに対して、大学図書館は支援を行っているのか」「もし実施している場合は、それに対してどのようなサービスを実施しているのか」ということが、個々の質問項目としては設定されていない。そのため、それぞれの教育プログラムやイベント等の取り組みに対して、どのような支援がどの程度行われているのか、十分には明らかになっていない。

つまり、先行研究では、正規課程の授業とそれ以外の教育プログラムやイベント等への大学図書館による支援として、どのサービスがどの程度実施されているのか、その現況と全体像が十分には明らかになっていないと言える。

また、上記のように、授業内外におけるサービスの現況が明らかになっていないため、それを実現するためのサービスの実施体制についても、現況が十分には明らかになっていない。先行研究では、教員や他部署との協働が行われている事例が存在する、職務の一環として「学士課程学生による研究」に対する支援を担当する図書館員が存在する等の要素は把握できるが、実施体制の全体像は十分には明らかになっていないと言える。

そして、A節でも述べた通り、大学全体の使命等のなかに「学士課程学生による研究」を位置づけることの重要性が指摘されている。しかし、これまでの先行研究では、大学図書館が実施する「学士課程学生による研究」に対する支援と、大学図書館あるいは大学全体の使命や戦略計画等との関係は調査されていないため、大学図書館による支援がどのような位置づけのもとで行われているのかについても、十分には明らかになっていない。

C. 本研究の目的と構成

本研究の目的は、北米の大学図書館が実施する「学士課程学生による研究」に対する支援の実態とその特徴を明らかにすることである。具体的には、B節で指摘した通りに先行研究では十分には明らかになっていない、(1) 授業内外においてどのサービスがどの程度実施されているのか、(2) どのような体制でサービスが実施されているのか、(3) それらは大学図書館あるいは大学全体においてどのように位置づけられているのか、の3点を検討課題として設定し、これらを質問紙調査とインタビュー調査によって明らかにする。本研究によって、学士課程教育改革の手段の1つとして位置づけられている「学士課程学生による研究」に対して、大学図書館がどのような支援をしているのか、その見取り図を明らかにすることができる。さらに、本研究は、学士課程教育において大学図書館が果たすべき役割を検討する際の一助になるとも考える。

本研究では、北米の大学図書館、具体的にはアメリカとカナダの大学図書館を調査対象とすることにした。その理由は、A節でも述べた通り、「学士課程学生による研究」の発祥の地はアメリカとされており、同時に大学図書館での取り組みも他国に先行していると言えるため、さらに、先行研究から隣国のカナダの大学図書館においても同様の取り組みが行われていることが判明しているためである。

そして、アメリカとカナダの大学図書館のなかでも、特に研究大学図書館に着目することにした。研究大学図書館に着目する理由は、他のタイプの大学においても「学士課程学生による研究」に対する熱心な取り組みが行われているものの³⁶⁾、A節で述べたように、「学士課程学生による研究」の嚆矢が研究大学であったこと、『学士課程教育の再編』が発表されて以降、研究大学において、学士課程教育改革の潮流とともに、大学の特性を活かすことができる「学士課程学生による研究」が広まったと言われていることから、大学図書館が実施する「学士課程学生による研究」に対する支援を見る際に、研究大学図書館が有効な存在で

あると考えられるためである。

本研究の構成は以下の通りである。まず、第II章において、本研究において実施した質問紙調査と訪問ないしメールによるインタビュー調査の概要を述べる。第III章A節では、質問紙調査の結果を主に用いて、北米の研究大学図書館における「学士課程学生による研究」に対する支援のためのサービスの実施状況について述べる。B節では、質問紙調査の結果を主に用いて、サービスがどのような体制で実施されているのかを述べる。C節では、インタビュー調査の結果を用いて、サービスがどのような位置づけのもとにあるのかを述べる。そして、第IV章では、第III章の結果に基づき、「学士課程学生による研究」に対する支援の特徴を、本節で述べた3点の検討課題に沿って整理する。以上によって、北米の大学図書館が実施する「学士課程学生による研究」に対する支援の実態とその特徴を明らかにする。最後に、第V章において本研究の成果と今後の研究課題をまとめる。

D. 「学士課程学生による研究」に対する支援のためのサービスの類型

本研究における調査に先立ち、B節で取り上げた先行研究^{25)~29)31)}における言及を抽出し、さらに著者による調査²⁾³⁷⁾を加えて、第1表の通りに、大学図書館が実施する「学士課程学生による研究」に対する支援のためのサービスについて、6つの類型を設定した。第1表に記載した先行研究における言及ならびに著者による調査を整理すると、以下の通りとなる。

「①学士課程学生による研究を促進する授業に対する支援」とは、授業改善の一環として初年次から卒業までの様々な段階で行われている、学士課程教育の正規課程の授業のなかに研究活動・研究体験を導入する試みに対する支援のことである。B節でも取り上げた学士課程学生研究協議会による文書²²⁾では、図書館による情報リテラシーや研究スキルの養成への支援が、カリキュラムのなかに組み込まれるべきと指摘されており、実際に大学図書館においてこれらの取り組みが行われている。

第1表 本研究で設定した6つの類型のサービス

	類型	先行研究における言及
①	「学士課程学生による研究」を促進する授業に対する支援	新見 (2014) ²⁾
②	オナーズ・プログラムまたはオナーズ学生に対する支援	Daly (2012) ²⁶⁾ Hensley ら (2014) ³¹⁾
③	学士課程学生研究プログラムに対する支援	Stamatoplos (2009) ²⁵⁾ Jones ら (2013) ²⁷⁾ Hayes-Bohanan (2013) ²⁸⁾ Knapp ら (2014) ²⁹⁾ Hensley ら (2014) ³¹⁾
④	学士課程学生による研究成果の発表会への関与	Jones ら (2013) ²⁷⁾ Hensley ら (2014) ³¹⁾
⑤	学士課程学生の研究論文誌への関与	Jones ら (2013) ²⁷⁾ Hensley ら (2014) ³¹⁾
⑥	図書館資源を活用した学士課程学生による研究成果の表彰制度の設置	Stamatoplos (2009) ²⁵⁾ Daly (2012) ²⁶⁾ 新見 (2012) ³⁷⁾ Hensley ら (2014) ³¹⁾

「②オナーズ・プログラムまたはオナーズ学生に対する支援」とは、高度な学びを希望する学生や入学時に選抜された学生に対する特別な教育プログラムの提供、最終年次の希望者による論文執筆プログラム等によって、卒業時に優等学位を与えるオナーズ・プログラムやその参加学生に対する支援のことである。なお、オナーズ・プログラムは古くから存在している教育プログラムであるが、最近では「学士課程学生による研究」を実現するための手段としての位置づけもなされるようになってきている¹⁹⁾²²⁾。

「③学士課程学生研究プログラムに対する支援」とは、希望する学生が、研究室で行われている研究プロジェクトに参加したり、メンター役の教員による指導のもとで研究を行う学士課程学生研究プログラム (undergraduate research opportunities program) に対する支援のことである。このようなプログラムは、授業期間中に実施されるだけでなく、夏季休暇期間に summer undergraduate research opportunities program という形で実施されることもある。

「④学士課程学生による研究成果の発表会への関与」とは、undergraduate symposium といった名称で開催されている、学士課程学生の研究成

果発表会への関与や参加学生に対する支援のことである。これらのイベントでは、学士課程学生によるポスターセッションやプレゼンテーション、パフォーミングアーツの実演等が行われている。

「⑤学士課程学生の研究論文誌への関与」とは、学士課程学生が執筆した研究論文を査読したうえで掲載する雑誌 (undergraduate research journal) に対する支援・関与のことである。このような雑誌は数多く存在しており³⁸⁾、そのなかには大学図書館が関わっているものもある。

「⑥図書館資源を活用した学士課程学生による研究成果の表彰制度の設置」とは、学士課程学生が図書館資源を活用しながら授業内外で取り組んだ研究を表彰することである。受賞者には賞金も授与されている。学生が応募する際には、研究成果物、研究プロセスや図書館資源の利用に関して記したエッセイ、文献・資料リスト、教員からの推薦等が必要であり、評価の際には、図書館資源の活用度、研究の質、学びの深さ等が重視されている³⁷⁾。

本研究では、以上の6つの類型のサービスについて、質問紙調査とインタビュー調査を用いて、その実施状況と実施体制、それらの位置づけについて調査する。

II. 北米の研究大学図書館における「学士課程学生による研究」に対する支援の実態調査

A. 質問紙調査

1. 概要

質問紙調査は、第I章B節における先行研究の整理に基づき、第I章C節で設定した、大学図書館における「学士課程学生による研究」に対する支援についての検討課題のうち、1点目の「授業内外においてどのサービスがどの程度実施され

ているのか」、2点目の「どのような体制でサービスが実施されているのか」を明らかにするためのものである。この2点を明らかにするために設定した質問紙調査の主な焦点は、(a) どのサービスがどの程度実施されているのか、(b) サービスの具体的な内容、(c) サービスの実施体制である。質問項目の概要は、第2表の通りである。具体的には、6つの種類のサービスの実施の有無とサービス内容の概要(①～⑥)、教員や他部署との協働の有無(①～⑥)、サービスに対する評価の実施の有無(⑦)、回答者に関するフェース

第2表 質問紙調査における質問項目の概要

①	「学士課程学生による研究」を促進する授業に対する支援 ・実施の有無* (Yes/No), サービス内容の概要 (選択肢, 自由記述) ・教員との協働の有無 (Yes/No), 概要 (自由記述) ・他部署との協働の有無 (Yes/No), 概要 (自由記述)
②	オナーズ・プログラムまたはオナーズ学生に対する支援 ・実施の有無* (Yes/No), サービス内容の概要 (自由記述) ・教員との協働の有無 (Yes/No), 概要 (自由記述) ・他部署との協働の有無 (Yes/No), 概要 (自由記述)
③	学士課程学生研究プログラムに対する支援 ・実施の有無* (Yes/No), サービス内容の概要 (自由記述) ・教員との協働の有無 (Yes/No), 概要 (自由記述) ・他部署との協働の有無 (Yes/No), 概要 (自由記述)
④	学士課程学生による研究成果の発表会への関与 ・実施の有無* (Yes/No), サービス内容の概要 (自由記述) ・参加学生に対する支援の有無 (Yes/No), サービス内容の概要 (自由記述) ・教員との協働の有無 (Yes/No), 概要 (自由記述) ・他部署との協働の有無 (Yes/No), 概要 (自由記述)
⑤	学士課程学生の研究論文誌への関与 ・実施の有無* (Yes/No), サービス内容の概要 (自由記述) ・教員との協働の有無 (Yes/No), 概要 (自由記述) ・他部署との協働の有無 (Yes/No), 概要 (自由記述)
⑥	図書館資源を活用した学士課程学生による研究成果の表彰制度の設置 ・実施の有無* (Yes/No), サービス内容の概要 (自由記述) ・教員との協働の有無 (Yes/No), 概要 (自由記述) ・他部署との協働の有無 (Yes/No), 概要 (自由記述)
⑦	サービスに対する評価 ・実施の有無* (Yes/No), 概要 (自由記述)
⑧	フェースシート項目 ・大学名* ・回答者の職位・職名* ・フォローアップ・インタビュー対応の可否, 可能な場合の連絡先

*必須回答の項目

シート項目(⑧)とし、選択肢または自由記述での回答を求めた。このうち、サービスの実施の有無、評価の実施の有無、大学名、回答者の職位・職名に関する9問を必須項目とした。質問紙はウェブフォーム形式とした。

なお、当初は全ての質問(必須項目9問・任意項目39問)を掲載した質問紙(以下、通常版)のみを用意したが、回答者の負担を減少させることを目的として、督促時に必須項目9問とフォローアップ・インタビューに関する任意項目2問のみを掲載した質問紙(以下、簡易版)も用意し、2種類の質問紙から回答者が選択できるようにした。

2. 調査対象と調査期間

調査対象は、アメリカとカナダの研究大学図書館とした。具体的には、研究図書館協会(Association of Research Libraries: ARL)に加盟する大学図書館115館³⁹⁾、ARL非加盟館だがOCLC Research Library Partnership(OCLC RLP)の加盟館である大学図書館18館⁴⁰⁾の合計133館である。OCLC RLPのみに加盟する館に関しては、カーネギー分類で「研究大学」⁴¹⁾と分類される大学の図書館を調査対象とした。なお、OCLC RLPのみに加盟する大学図書館は、カナダにはなく、アメリカにのみ存在した。

調査依頼は、調査対象館の図書館員に対してメールにて行った。メールの送付先は、各館のスタッフ一覧を参照して、所属や職名から回答者の候補となりえる人物を選定した。依頼の際には、他の同僚図書館員への転送も可能であること、大学名を明記していれば同一大学における複数回答も可能であることを伝えた。

調査依頼と質問紙の回収は、(1)2014年10月から12月、(2)2015年3月に行った。(1)の期間において、最初の依頼時には通常版の質問紙のみを用意していたが、督促時に簡易版も用意した。また、(1)の期間はARL加盟館のみを対象としたが、(2)の期間にARL加盟館に加えてOCLC RLPの加盟館も対象に加えた。

第3表 回答館の国別・設置種別集計

	公立	私立	計
アメリカ	19	7	26
カナダ	4	0	4

第4表 回答者の職位

職位	人数
館長 ¹⁾	1
副館長 ²⁾	3
部門長 ³⁾	12
その他の図書館員	8
無回答	6

¹⁾ Dean

²⁾ Associate University Librarian, Associate Dean

³⁾ 各部門の Director, Head

3. 回答数と回収率

調査対象133館のうち30館より回答があり、回収率は22.5%であった。通常版による回答は25館、簡易版による回答は5館であった。大学名が明記してあった回答は、24館(通常版19館、簡易版5館)であった。また、無記名であっても、他の回答欄の記述から大学名が確実に判明したところが3館ある。その他の回答も大学名を類推できた。なお、1館より複数回答があったため、集計時に統合した。アメリカの大学図書館は26館(公立大学19館、私立大学7館)から回答があり、カナダの大学図書館は4館(全て公立大学)から回答があった(第3表)。なお、調査依頼のメールを送付した人物と回答者が異なる図書館もあった。

回答者の職位・職名が記載されていたのは24館であった。職位別に見ると、館長からの回答は1館、副館長からの回答は3館、部門長からの回答は12館、その他の図書館員からの回答は8館であった(第4表)。なお、回答者の職名に関しては、第III章B節1項において分析結果とあわせて述べる。

B. 訪問ないしメールによるインタビュー調査

1. 概要

質問紙調査においてフォローアップ・インタ

第5表 インタビュー調査の概要

図書館名	手段	実施日・回答日	質問項目 ^{注)}			
			A	B	C	D
カリフォルニア大学バークレー校図書館 (University of California, Berkeley)	訪問	2015年5月4日 (10:00~10:30)	○	○	○	—
ニューヨーク州立大学バッファロー校図書館 (University at Buffalo, The State University of New York)	訪問	2015年5月7日 (10:30~11:30)	○	○	—	○
プリンストン大学図書館 (Princeton University)	メール	2015年3月24日	○	○	—	○
ルイビル大学図書館 (University of Louisville)	メール	2015年3月27日	○	○	○	○
トロント大学図書館 (University of Toronto)	メール	2015年4月18日	○	○	○	○
オハイオ州立大学図書館 (Ohio State University)	メール	2015年4月29日	○	○	○	○

注)・A:「学士課程学生による研究」を支援するためのサービスの図書館における位置づけ
 ・B:「学士課程学生による研究」の大学における位置づけ
 ・C:(必要に応じて)「学士課程学生による研究」を支援するためのサービスの実施体制
 ・D:(必要に応じて)質問紙調査の回答の補足説明

ビューの対応が可能と回答があった16館の図書館員に対して、質問項目を提示したうえで、訪問インタビューないしメール・インタビューの依頼をメールにて行った。その結果、6館の図書館員に対して実際にインタビューを行うことができた。

インタビュー調査は、第I章B節における先行研究の整理に基づき、第I章C節で設定した、大学図書館における「学士課程学生による研究」に対する支援についての検討課題のうち、3点目の「それらは大学図書館あるいは大学全体においてどのように位置づけられているのか」を明らかにするためのものである。これを明らかにするために行ったインタビュー調査の概要は、第5表の通りである。インタビューの際には、(a)「学士課程学生による研究」を支援するためのサービスは、図書館において重要かつ価値あるサービスであると考えられているのか(質問A)、(b)「学士課程学生による研究」の促進は大学の使命または戦略計画と関連づけられているのか(質問B)、という点に着目した質問を行った。さらに、必要に応じて行った質問がある。質問紙調査の回答だけではサービスの実施体制に関して分からない部分があり、追加の質問をした場合(質問C)、

質問紙調査の回答に関する補足説明を求めた場合(質問D)がある。

また、全ての回答者から大学名・回答者名・職位・職名の掲載について許可を得ることができた。なお、回答者の職位・職名に関しては回答時点での記述に基づいている。

2. 訪問インタビュー

訪問によるインタビューは、カリフォルニア大学バークレー校図書館とニューヨーク州立大学バッファロー校図書館の2館で実施した。インタビューは、両大学とも30分程度と依頼したうえで事前に質問リストを送付し、それに基づいて回答してもらう形式で実施した。

カリフォルニア大学バークレー校図書館では、2015年5月4日に副館長のElizabeth Dupuis氏と面会した。Dupuis氏は図書館の教育・利用者サービス分野を担当する副館長であり、中央館・学部学生用図書館・主題別図書館を含む学内の主要図書館も統括している。

ニューヨーク州立大学バッファロー校図書館では、2015年5月7日にMargaret R. Wells氏とCynthia A. Tysick氏と面会した。Wells氏は

第6表 全回答館（30館）における6類型のサービスの実施状況

	類型	実施	未実施	無回答
①	「学士課程学生による研究」を促進する授業に対する支援	30	0	0
②	オナーズ・プログラムまたはオナーズ学生に対する支援	28	1	1
③	学士課程学生研究プログラムに対する支援	19	9	2
④	学士課程学生による研究成果の発表会への関与	16	10	4
⑤	学士課程学生の研究論文誌への関与	9	17	4
⑥	図書館資源を活用した学士課程学生による研究成果の表彰制度の設置	14	13	3

(N=30)

インタビュー時には管理部門担当の副館長室に所属していたが、質問紙調査の回答時にはパブリック・サービスと Arts & Sciences Libraries の部門長であった。Tysick 氏はインタビュー時には社会科学分野を担当しており、2017年現在は教育サービス部門長である。

3. メール・インタビュー

メールによるインタビューは4館で実施した。プリンストン大学図書館の Senior Reference Librarian である Mary W. George 氏（2015年3月24日回答）、ルイビル大学図書館のレファレンス・情報リテラシー部門長である Anna Marie Johnson 氏（2015年3月27日回答）、トロント大学図書館の Student Engagement Librarian である Heather Buchansky 氏（2015年4月18日回答）、オハイオ州立大学図書館の Undergraduate Engagement Librarian である Elizabeth L. Black 氏（2015年4月29日回答）からそれぞれ回答があった。

III. 「学士課程学生による研究」を支援するためのサービスの現況

質問紙調査とインタビュー調査の結果を踏まえ、「学士課程学生による研究」に対するサービスの概況について、その実施状況と実施体制、図書館と大学における位置づけをまとめる。本章の内容は、特に注記がない場合は各館における回答時点の状況に基づくものである。なお、大学名については、記載について許可を得ているインタビュー調査実施の6館（第5表）のみ実名を明記し、それ以外の24館は匿名とする。

A. 大学図書館におけるサービスの実施状況

質問紙調査の結果（第6表）に基づき、「学士課程学生による研究」に対する支援の実施状況について述べる。また、質問紙調査を踏まえて実施したインタビュー調査において、質問紙調査の回答についての補足説明を求めた大学もある。その回答も本節において利用している。

1. 「学士課程学生による研究」を促進する授業に対する支援

「学士課程学生による研究」を促進する正規課程の授業に対する支援は、全ての回答館で実施されていた。

通常版で回答した25館には、対象とする科目レベルと授業形式、分野についても選択肢形式で聞いている。科目のレベル別に見ると、初年次科目は25館、入門・初級レベルの科目は24館、中上級レベルの科目は23館、キャップストーン科目は21館において実施されていた。対象とする科目のレベルには、特に片寄りはない。

授業形式別⁴²⁾に見ると、講義は25館、ディスカッションは23館、セミナーは23館、実験は12館、スタジオは15館、教員による指導や単位認定がある個人研究は19館、その他は3館という結果であった。その他の具体的な回答としては、オンライン授業があった。講義やディスカッション、セミナーにおける実施の割合は、特に高いと言える。

分野別に見ると、自然科学は22館、工学は20館、人文科学は24館、社会科学は24館、芸術は22館、その他は7館で実施されていた。その他

大学図書館が実施する「学士課程学生による研究」に対する支援の実態と特徴

としては、ヘルスサイエンスやビジネス、ホテル学等があげられていた。分野に関しては、特に片寄りはなかった。

上記のような授業に対する支援として実施しているサービスを聞いたところ、授業のなかで実施する情報リテラシーの指導は25館、オンラインでのリサーチ・ガイドや主題別ガイドの提供は24館、学生に対する1対1での指導は24館、教員を対象とするシラバスや授業設計の相談受付は18館、授業で課す課題についての教員への助言は20館、図書館資源を利用させる課題「library research assignments」の作成は22館、その他は5館という結果であった（第7表）。

また、自由記述欄において、プリンストン大学図書館から、必修科目である初年次のライティング授業（55クラス）にそれぞれ担当の図書館員を配置し、授業内での情報リテラシーの指導や受講学生に対する個別の相談受付を行っているという回答があった。

2. オナーズ・プログラムまたはオナーズ学生に対する支援

オナーズ・プログラムまたはプログラムに参加するオナーズ学生に対する支援は、28館で実施されていた。なお、未実施との回答があったプリンストン大学からは、オナーズ・プログラムは存在しないが、最終年次において論文執筆または研究プロジェクトに取り組むことを全学生に対して必須としており、これらがオナーズ・プログラムと同等の位置づけとなっているという補足説明が

あった。そのため、実質的には29館で実施されていると考えられるだろう。

通常版で実施と回答した22館に対しては、サービスに関する詳細も聞いた。オナーズ・プログラムにおいて図書館員が授業を担当している、オナーズ学生の寮において図書館員がオフィスアワーを実施している、オナーズ論文を機関リポジトリに掲載している、オナーズ・プログラムのリエゾンを担当する図書館員を配置している、オナーズ・プログラムのサテライトオフィスを館内に設置しているという回答があった。また、ルイビル大学図書館の回答者から紹介を受けた事例報告文献⁴³⁾では、初年次のオナーズ学生を対象とするオリエンテーションに図書館が関わり、その際に特殊コレクション見学の時間等が設けられていること、オナーズ・プログラムの初年次授業において「library research assignments」を課していること等が述べられていた。一方、オナーズ・プログラムまたはオナーズ学生に対する支援は行っているが、特別プログラムのような形でのサービスではなく、他の授業やプログラムと同等のサービスを提供しているという回答もあった。

3. 学士課程学生研究プログラムに対する支援

学士課程学生研究プログラムに対する支援は、19館で実施されていた。通常版で実施と回答した14館に対してサービスに関する詳細を聞いたところ、オハイオ州立大学図書館からは、連携先であるUndergraduate Research Office⁴⁴⁾管轄のピア・アドバイザーがプログラム参加者に対して行って

第7表 「学士課程学生による研究」を促進する授業に対するサービス

サービス	実施館
授業のなかで実施する情報リテラシーの指導	25
オンラインでのリサーチ・ガイドや主題別ガイドの提供	24
学生に対する1対1での指導	24
教員を対象とするシラバスや授業設計の相談受付	18
授業で課す課題についての教員への助言	20
図書館資源を利用させる課題「library research assignments」の作成	22
その他	5

(N=25)

いる相談受付サービスのための場所の提供、上記部署との協働による様々なワークショップの開催⁴⁵⁾といった取り組みを行っているという回答があった。ニューヨーク州立大学バッファロー校図書館からは、Center for Undergraduate Research and Creative Activitiesを担当するリエゾン・ライブラリアンを配置しているという回答があった。その他の大学からは、「学士課程学生による研究」に関するプログラム等を管轄する委員会に、図書館員が参加しているという回答もあった。

4. 学士課程学生による研究成果の発表会への関与
学士課程学生による研究成果の発表会への関与は16館で実施されていた。また、任意回答の項目として、発表会に参加する学生に対する支援を行っているかも尋ねている。その結果、発表会自体への関与はしていないと回答した館のなかで、参加学生に対する支援は行っているところが6館あった。

通常版で発表会に関与していると回答した12館に対してサービスに関する詳細を聞いたところ、オハイオ州立大学図書館などから、図書館員が発表会に評価者として参加している、参加学生の研究ポスター等を館内で展示しているという回答があった。また、発表会における成果物を機関リポジトリに掲載している、発表会に参加する学生を対象としたプレゼンテーションや研究ポスターの作成に関する助言、あるいはそれらに関するワークショップ開催を行っている、ポスター印刷サービスを行っているといった回答もあった。

5. 学士課程学生の研究論文誌への関与

学士課程学生による研究論文を掲載する雑誌への関与は、9館で行われていた。通常版で実施と回答した7館に対して詳細を聞いたところ、トロント大学図書館やオハイオ州立大学図書館などから、自館のオープンアクセス誌のプラットフォームで学士課程学生の研究論文誌も刊行しているという回答があった。これは、大学図書館によるオープンアクセス誌刊行という動向⁴⁶⁾の中に位置づけることができるだろう。

今回の調査では、機関リポジトリについての質問項目を設けていなかった。しかし、学士課程学生の研究論文誌に関与していない館のうち、少なくとも7館において学士課程学生の研究成果物を機関リポジトリに掲載していることが、他の項目の自由記述欄での回答から分かった。そのため、学士課程学生の研究成果発信に対する支援を行っている図書館はそれなりにあると言える。

6. 図書館資源を活用した学士課程学生による研究成果の表彰制度の設置

授業や教育プログラム等において学士課程学生が図書館資源を活用しながら取り組んだ研究を表彰する制度は、14館で設置されていた。通常版で設置していると回答した10館に対して詳細を聞いたところ、研究成果発表会の一環として図書館による賞を設けている、「学士課程学生による研究」を促進する授業において賞への応募を働きかけている、評価委員会に教員が参加しているといった回答があった。また、受賞者の研究成果物を機関リポジトリ等で公開しているところもある。

なお、カリフォルニア大学バークレー校図書館からは、このような表彰制度の形式は同校が最初に創設したものであり、その後10年以上経過した現在では、多くの大学で実施されるようになったという説明があった。また、トロント大学図書館からは表彰制度の設置を検討中という回答があり、実際に2015～2016年の学期に賞を新たに設立したことをウェブサイト⁴⁷⁾で確認した。一方、オハイオ州立大学図書館からは、以前は賞を設けていたが廃止したという回答があった。しかし、表彰制度とは異なる形式であるが、研究に取り組む学士課程学生に対して助成金の支給と図書館員による支援を行うフェロシップ制度(Undergraduate Library Research Fellowship)を、新たに開始したことをウェブサイト⁴⁸⁾で確認した。

B. 大学図書館におけるサービスの実施体制

質問紙調査の結果を中心としつつ、質問紙調査での回答を踏まえてインタビュー調査において

大学図書館が実施する「学士課程学生による研究」に対する支援の実態と特徴

行った、実施体制に関する追加質問の回答結果も用いて、「学士課程学生による研究」を支援するためのサービスがどのような体制で実施されているのかについて述べる。

1. サービスを担う図書館員

「学士課程学生による研究」を支援するためのサービスがどのような図書館員によって担われているのか、その一端を明らかにするために、質問紙調査の回答者の職名を分析した。必ずしも回答者すなわち担当者・担当責任者とは言えないが、回答者は「学士課程学生による研究」を支援するためのサービスと何等かの関わりがあると考えられるため、回答者の職名を分析するのは意義があると言える。

第II章A節3項でも述べた通り、質問紙調査において回答者の職名が明記されていたのは24

館であった。職名で使用されている語句を見たところ、「サービスの名称」「主題分野」「サービスの対象者」の3つのカテゴリーに分けることができた。このカテゴリーをもとに回答者の担当領域をまとめたのが第8表である。この結果より、「学士課程学生による研究」を支援するためのサービスの担い手は、①人的支援サービスを担当する図書館員、②サブジェクトライブラリアン、③学士課程学生に対するサービスを担当する図書館員が中心であると言える。

人的支援サービスを担当する図書館員は、情報リテラシーやレファレンス、利用者サービスの提供、教育・学習・研究に対する支援を通して、「学士課程学生による研究」を支援している。また、サブジェクトライブラリアンも担当主題の領域において、「学士課程学生による研究」に対する支援を行っている。学士課程学生に対するサービス

第8表 回答者の職名から見る担当領域

担当領域	職名で使用されている語句	件数	
人的支援	情報リテラシー レファレンス	Information Literacy	(1)
		Information Services	(1)
		Instructional Services	(1)
		Library Instruction	(2)
		Reference	(2)
	利用者サービス	Public Services	(1)
		User Services	(2)
	教育支援	Education	(1)
		Educational Initiatives	(1)
		Instructional Design	(1)
		Teaching	(2)
	学習支援	Learning	2
	研究支援	Research	4
	主題分野	主題を表す語句	3
学士課程学生	College Library (undergraduate library)	(1)	
	Student Engagement	(1)	
	Undergraduate Education	(1)	
	Undergraduate Engagement	(1)	
	Undergraduate Services	(2)	
アウトリーチ	Outreach	1	

注) 職名に複数の語句を含む場合、それぞれの数をカウントしている。

を担当領域としている図書館員は、学士課程学生に特化した形でのサービスを行っており、その一環として「学士課程学生による研究」に対する支援も担当している。

なお、上述の通り、必ずしも回答者すなわち担当者・担当責任者とは言えない。たとえば、オハイオ州立大学図書館からは、学士課程学生の研究成果の機関リポジトリへの掲載に関しては、回答者ではなく機関リポジトリ担当者が行っているとの説明があった。

2. 教員や他部署との協働

質問紙調査において通常版で回答した館に対しては、それぞれのサービスを実施するにあたっての協働の有無についても尋ねている。

「①学士課程学生による研究を促進する授業に対する支援」では、通常版で実施と回答した25館のうち、22館が教員との協働、14館が他部署との協働を実施していた。「②オナーズ・プログラムまたはオナーズ学生に対する支援」では、通常版で実施と回答した22館のうち、18館が教員との協働、8館が他部署との協働を実施していた。「③学士課程学生研究プログラムに対する支援」では、通常版で実施と回答した14館のうち、7館が教員との協働、11館が他部署との協働を実施していた。「④学士課程学生による研究成果の発表会への関与」では、通常版で実施と回答した12館のうち、7館が教員との協働、6館が他部署との協働を実施していた。「⑤学士課程学生の研

究論文誌への関与」では、通常版で実施と回答した7館のうち、1館が教員との協働、3館が他部署との協働を実施していた。「⑥図書館資源を活用した学士課程学生による研究成果の表彰制度の設置」では、通常版で実施と回答した10館のうち、6館が教員との協働、4館が他部署との協働を実施していた。

6つの種類のサービスにおける協働の実施率にはばらつきがあるものの、全体的に見ると、教員との協働は比較的高い割合で行われており、他部署との協働もそれなりに行われている（第9表）。

また、質問紙調査の自由記述欄には、具体的な連携先の名称についての回答もあった（第10表）。複数の館で言及されていたのは、「学士課程学生による研究」を管轄する部署やプログラム、オナーズ・プログラムであった。その他、学士課程教育等を管轄する部署やプログラムも言及されていた。

本章A節3項でも述べた通り、ニューヨーク州立大学バッファロー校図書館では、Center for Undergraduate Research and Creative Activities とのリエゾンを担当する図書館員を配置している。担当図書館員は、上記部署による研究成果発表会等のイベントの企画・運営にも関与している。また、図書館と上記部署が協働して学士課程学生の研究成果を表彰する賞も設けている。オハイオ州立大学図書館では、Undergraduate Engagement Librarian（回答者）が、職務の一環として Undergraduate Research Office やオ

第9表 教員・他部署との協働の実施率

類型	教員との協働の実施率	他部署との協働の実施率
① 「学士課程学生による研究」を促進する授業に対する支援	88%	56%
② オナーズ・プログラムまたはオナーズ学生に対する支援	82%	36%
③ 学士課程学生研究プログラムに対する支援	50%	79%
④ 学士課程学生による研究成果の発表会への関与	58%	50%
⑤ 学士課程学生の研究論文誌への関与	14%	43%
⑥ 図書館資源を活用した学士課程学生による研究成果の表彰制度の設置	60%	40%

注) 実施率の算出方法は、「通常版で協働を実施と回答があった館数÷通常版でサービスを実施と回答があった館数」である。

第10表 質問紙調査の回答で言及されていた連携先の名称

「学士課程学生による研究」を管轄する部署やプログラム
<ul style="list-style-type: none"> ・ Center for Undergraduate Research and Creative Activities ・ Center for Undergraduate Scholarly Engagement ・ Office for Undergraduate Research ・ Office of Undergraduate Research ・ Summer Undergraduate Research Program ・ Undergraduate Research Network Program ・ Undergraduate Research Office ・ Undergraduate Research Scholars Program ・ Undergraduate Research Support Committee
オナーズ・プログラム
<ul style="list-style-type: none"> ・ Honors College ・ Honors Program ・ University Honors College
学士課程教育等を管轄する部署やプログラム
<ul style="list-style-type: none"> ・ Dean of the College Office ・ Department of English ・ General Education Requirement ・ Office of Faculty Instructional Development and Research, Online Education ・ University Writing Program

ナーズ・プログラムと協働している。

3. サービスに対する評価の実施

質問紙調査において、6つの種類のサービスに対して図書館で評価を実施しているのか聞いたところ、12館から実施しているという回答があった。

自由記述欄に記載があった館について、その具体的な説明を見ると、体系的なデータ収集や数値データに基づく評価を行っていた館（5館）、体系的ではないが逸話的な事例等を通じた評価は行っていると回答した館（2館）、非公式な形での評価のみ行っていると回答した館（1館）があった。

C. 大学図書館と大学におけるサービスの位置づけ

本節では、6館に対して実施したインタビュー調査（第5表）の結果と回答館から提供・紹介を受けた関連文書に基づき、「学士課程学生による研究」を支援するためのサービスがどのような位置づけのもとで実施されているのかについて述べる。インタビュー調査における各館からの回答の概要は、第11表の通りである。

1. 大学図書館における位置づけ

「学士課程学生による研究」に対する支援が自館において重要かつ価値あるサービスとして捉えられているのか尋ねたところ、全ての回答館から重要なサービスの1つとして位置づけられているという趣旨の回答があった。

カリフォルニア大学バークレー校図書館からは、「学士課程学生による研究」は図書館と大学の双方において大変重要な目標となっており、図書館は、多くの情報資源や貴重書等の一次資料、学内に複数ある専門的な図書館でのサービスを提供することによって貢献しているという回答があった。

ニューヨーク州立大学バッファロー校図書館からは、「学士課程学生による研究」に対する支援は図書館にとって欠くことのできないサービスであり、図書館資源やサービス、専門家が授業やプログラムのなかに統合されているという回答があった。

プリンストン大学図書館からは、大学として、全ての学士課程学生に最終年次での論文執筆を課しており、図書館ではそれらに対する支援として、学生への対面やオンラインでの助言、学生が執筆した論文の機関リポジトリへの掲載等を行っ

第11表 インタビュー調査における回答の概要

【カリフォルニア大学バークレー校図書館】	
図書館	「学士課程学生による研究」は、図書館と大学の双方において大変重要な目標となっており、図書館は、多くの情報資源や貴重書等の一次資料、学内に複数ある専門的な図書館でのサービスを提供することによって貢献している。
大学	現在の学長が学士課程学生の経験（undergraduate experience）を同校の主要な目標の1つとして定めたこともあり、キャンパス内において学士課程学生の活動や授業、生活等が最優先事項の1つになった。
【ニューヨーク州立大学バッファロー校図書館】	
図書館	「学士課程学生による研究」に対する支援は、図書館にとって欠くことのできないサービスであり、図書館資源やサービス、専門家が授業やプログラムのなかに統合されている。
大学	大学全体として、「学士課程学生による研究」を大学での学生の経験に組み込むことに力を入れている。2016年秋から開始される新たな一般教育プログラムでは、全ての学士課程学生が情報リテラシーや研究等のコンピテンシーを身につけられるようにするための試みが行われ、図書館も関与する予定である。
【プリンストン大学図書館】	
図書館	大学として、全ての学士課程学生に最終年次での論文執筆を課しており、図書館ではそれらに対する支援として、学生への対面やオンラインでの助言、学生が執筆した論文の機関リポジトリへの掲載等を行っている。
大学	多くの博士課程プログラムに所属する大学院生がいるが、以前から大学として学士課程教育にも焦点を当てている。
【ルイビル大学図書館】	
図書館	「学士課程学生による研究」に対する支援は、図書館にとって重要かつ価値あるサービスであると考えているが、明示的なものにはなっていない。
大学	以前は、大学の戦略計画のなかで「学士課程学生による研究」が取り上げられていたが、現在の戦略計画では取り上げられていない。
【トロント大学図書館】	
図書館	「学士課程学生による研究」に対する支援は、図書館にとって重要かつ価値あるサービスである。図書館の戦略計画の文書（2013～2018年）のなかでも取り上げられている。
大学	大学の長期戦略計画の文書においても、「学士課程学生による研究」が取り上げられている。また、2014年に学士課程教育におけるイノベーションを担当する副学長補佐のポジションが設置された。
【オハイオ州立大学図書館】	
図書館	「学士課程学生による研究」に対する支援は、図書館の戦略計画（2011～2016年）の重点項目のなかで扱われている。
大学	学士課程教育に関する戦略計画（2012～2017年）において、「学士課程学生による研究」が取り上げられている。また、新しい学長が教育・学習の分野を大学全体のなかで重視している。

注) 図書館: 「学士課程学生による研究」を支援するためのサービスの図書館における位置づけ
 大学: 「学士課程学生による研究」の大学における位置づけ

ているという回答があった。

また、図書館の戦略計画において、「学士課程学生による研究」に対する支援が明示的に言及されているという回答もあった。

トロント大学図書館の戦略計画（2013～2018年）⁴⁹⁾では、「学士課程学生による研究」に対する支援が、「革新的な探求（Innovative inquiry）」の項目において取り上げられている。当初の戦略計画文書⁵⁰⁾では、学士課程学生による研究成果

の発表会が紹介されており、2016年に改定された版⁴⁹⁾では、図書館資源を活用した研究成果の表彰制度、学生の研究論文誌に関する学内プログラムが紹介されている。

オハイオ州立大学図書館では、戦略計画（2011～2016年）⁵¹⁾の「研究とイノベーション（Research & Innovation）」の項目において、「学士課程学生による研究」に対する支援が、デジタル出版や研究データ管理等と並んで学内の研究活

動を促進するための重点事項の1つとして記載されている。また、「教育と学習」の項目では、学生の経験 (student experience) を促進するために、Undergraduate Research Office やオナーズ・プログラム等と連携していくことが述べられている。

ルイビル大学図書館からは、「学士課程学生による研究」に対する支援は重要かつ価値あるサービスであると考えているが、特に明示的なものにはなっていないという説明があった。

2. 大学における位置づけ

「学士課程学生による研究」の促進が大学の使命または戦略計画と関連づけられているのか尋ねたところ、ほとんどの回答館において「学士課程学生による研究」の促進が大学全体における重要事項の1つとして扱われていることが分かった。

ニューヨーク州立大学バッファロー校図書館からは、大学として「学士課程学生による研究」を学生の経験に組み込むことに力を入れており、2016年秋から開始される新たな一般教育プログラムでは、全ての学士課程学生が情報リテラシーや研究等のコンピテンシーを身につけられるようにするための試みが行われ、図書館も関与する予定であるという回答があった。その後公表された情報によると、ニューヨーク州立大学システム全体の一般教育プログラムの変更を受け、2016年秋入学学生より、バッファロー校でも一般教育要件としてキャップストーン科目が全ての学士課程学生に課されることになった⁵²⁾。

大学あるいは学長等による学士課程教育の充実の方針を背景としている場合もあった。たとえば、プリンストン大学図書館からは、同大には多くの博士課程プログラムに所属する大学院生がいるが、以前から学士課程教育にも焦点を当てているという回答があった。さらに、回答者から紹介を受けた大学ウェブサイトに掲載されている「大学概要」⁵³⁾では、同大学は学士課程教育に力を入れているという、研究大学でも独特な存在であると述べられており、同様の記載が大学のミッションステートメント⁵⁴⁾にもあった。

トロント大学図書館からは、大学の長期戦略計

画⁵⁵⁾において「学士課程学生による研究」が取り上げられているという回答があった。その文書では、トロント大学の研究の幅広さと強みを生かして、学士課程を含む全ての教育課程に研究体験を取り入れることが目標の1つとされている。さらに、学士課程学生に研究を体験させる取り組みに力を入れているとも述べられている。また、2014年に学士課程教育におけるイノベーションを担当する副学長補佐のポジションが設置されたという説明も、回答者よりあった。

オハイオ州立大学図書館からは、学士課程教育に関する戦略計画 (2012~2017年)⁵⁶⁾において、「学士課程学生による研究」が取り上げられているという回答があった。その文書では、「研究とイノベーション (Research & Innovation)」の項目において、「学士課程学生による研究」に対する意識の醸成や参加の促進等が述べられている。また、新しい学長が教育・学習の分野を大学全体のなかで重視しているという説明も、回答者よりあった。

カリフォルニア大パークレー校図書館からは、現在の学長が学士課程学生の経験 (undergraduate experience) を同校の主要な目標の1つとして定めたこともあり、キャンパス内において学士課程学生の活動や授業、生活等が最優先事項の1つになったという説明があった。

一方、ルイビル大学図書館からは、以前は大学の戦略計画のなかで「学士課程学生による研究」が取り上げられていたが、現在の戦略計画では取り上げられていないという回答があった。

IV. 「学士課程学生による研究」に対する支援の特徴

本章では、第III章における質問紙調査とインタビュー調査の結果に基づき、大学図書館が実施する「学士課程学生による研究」に対する支援の特徴を整理する。整理の際には、第I章B節において指摘した従来の先行研究では十分に明らかになっていない点を踏まえて、第I章C節において設定した3点の検討課題に沿って検討する。具体的には、大学図書館が実施する「学士課程学生による研究」に対する支援に関して、(1) 授業

第12表 完答館(26館)における6類型のサービスの実施状況

	類型	実施館
①	「学士課程学生による研究」を促進する授業に対する支援	26
②	オナーズ・プログラムまたはオナーズ学生に対する支援	25
③	学士課程学生研究プログラムに対する支援	18
④	学士課程学生による研究成果の発表会への関与	16
⑤	学士課程学生の研究論文誌への関与	9
⑥	図書館資源を活用した学士課程学生による研究成果の表彰制度の設置	13

(N=26)

内外においてどのサービスがどの程度実施されているのか、(2) どのような体制でサービスが実施されているのか、(3) それらは大学図書館あるいは大学全体においてどのように位置づけられているのか、の3点に沿って検討する。

最初に、(1) の検討課題について整理する。まず、「学士課程学生による研究」に対する支援の現況をより明確化するために、質問紙調査において、6つの類型のサービスの実施の有無について全て回答があった26館(以下、完答館)の実施状況を見た。なお、完答館26館の内訳は、通常版での回答が21館、簡易版での回答が5館である。

第12表は、完答館における6つの類型のサービスの実施状況を示したものである。「学士課程学生の研究論文誌への関与」以外のサービスは、半数以上の館で実施されていた。なお、第III章A節5項でも述べた通り、研究論文誌には関与していなくても、それに類する取り組みとして、学士課程学生の研究成果の機関リポジトリへの掲載が行われている場合があった。

6つの類型のサービスは、いずれもそれなりに実施されていると言える。特に、26館全てで実施されていた「学士課程学生による研究を促進する授業に対する支援」、そして、同等の取り組みに対する支援を行っている館を含めると、実質的に全てで実施されていたと見なせる「オナーズ・プログラムまたはオナーズ学生に対する支援」は、大学図書館が実施する「学士課程学生による研究」に対する支援のなかで、中核的な位置を占めていると言える。

また、各館が実施するサービスの数を見たところ、

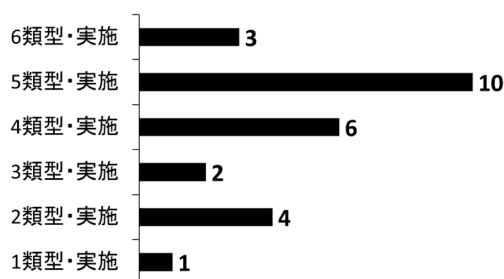
6つの類型全てのサービスを実施していたのは3館、5つの類型のサービスを実施していたのは10館、4つの類型を実施していたのは6館、3つの類型を実施していたのは2館、2つの類型を実施していたのは4館であった(第1図)。1つの類型のみを実施していたところが1館あったが、ここはオナーズ・プログラムは存在しないが同等の取り組みに対する支援を行っていると回答した館であった。

以上より、実質的に完答館の26館全てにおいて2つ以上の類型のサービスが行われており、半数の館において5つ以上、7割の館において4つ以上の類型のサービスが実施されていることが分かった。授業内外で取り組まれている「学士課程学生による研究」に対する支援は、大学図書館においてかなりの程度実施されているサービスであると言える。

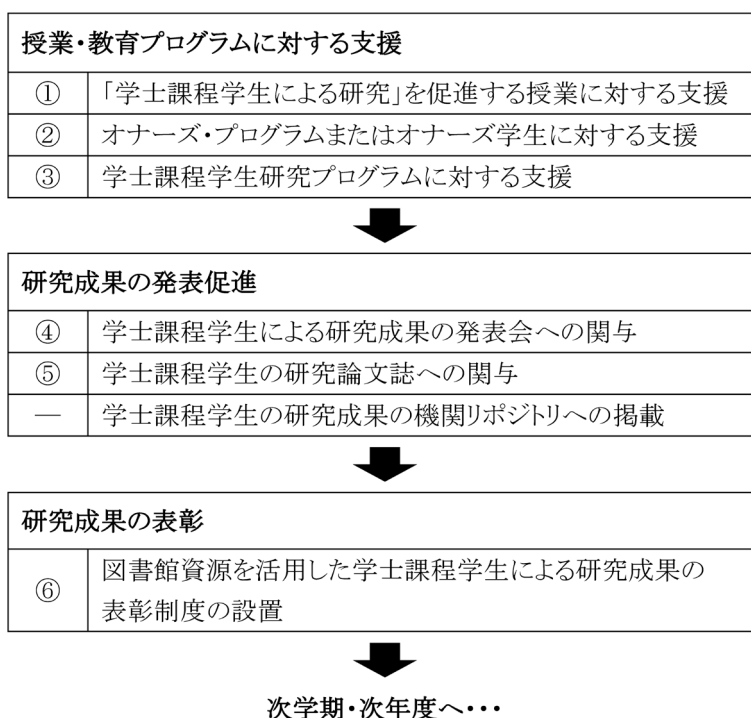
本研究で設定した6つの類型のサービスは、学士課程学生が行う学習活動・研究活動のサイクルを支援するものであると言える。つまり、大学図書館では、学生が受講する授業や参加する各種教育プログラムにおいて、情報リテラシーの養成や研究を行うにあたっての相談受付、図書館資源や設備の提供といった面から支援を行い、それらの支援を通して生み出された研究成果に対しても、成果物の発表促進や表彰等を行っている(第2図)。上述のように、7割以上の館において4つ以上の類型のサービスが実施されているという現況は、大学図書館が学士課程学生の活動を幅広く支援していることの表れであると言えるだろう。

次に、(2) の検討課題について整理する。(1)

大学図書館が実施する「学士課程学生による研究」に対する支援の実態と特徴



第1図 完答館（26館）におけるサービスの実施数



第2図 「学士課程学生による研究」に対する支援のサイクル

の検討課題で整理した通り、「学士課程学生による研究」に対して幅広い範囲の支援を行っていることもあり、それらには様々な図書館員が関わっていると言えるが、その中心的な担い手は人的支援サービスを担当する図書館員やサブジェクトライブラリアン、学士課程学生に対するサービスを担当する図書館員である。また、彼らの中には「学士課程学生による研究」を管轄する部署のリエゾンを担当していたり、関連する図書館外の委員会に参加している者もいる。

本研究の結果において特徴的なのは、学士課程学生に対するサービスを担当領域としている図書館員の存在であろう。北米の研究大学図書館には学士課程学生に対するサービスに特化した学部学生用図書館（undergraduate library）の伝統があるが⁵⁷⁾、学部学生用図書館を設置している大学だけでなく、設置していない大学にも学士課程学生に特化した図書館員が存在し、「学士課程学生による研究」に対する支援を行っていることが分かった。

そして、「学士課程学生による研究」に対する

支援を実施する際には、教員や他部署との協働が図られている場合もある。第9表において6つの類型別に見た通り、教員との連携は比較的高い割合で行われており、他部署との連携もそれなりに実施されていることが分かった。教員との協働は授業やオナーズ・プログラムに対する支援で実施率が高く、他部署との協働は学士課程学生研究プログラムに対する支援で実施率が高かった。これらは、図書館単独という形ではなく、協働による実施を行うことが効果的であると考えられる。

最後に、(3)の検討課題について整理する。インタビュー調査の結果より、「学士課程学生による研究」の促進が、大学全体における重要事項の1つとして扱われていること、大学図書館としても、「学士課程学生による研究」に対する支援を重要なサービスの1つとして位置づけていることが分かった。これは、質問紙調査の結果において、「学士課程学生による研究」に対する支援が、大学図書館においてかなりの程度実施されているサービスであった点とも合致すると言える。また、「学士課程学生による研究」の促進が、「研究大学」としてのアイデンティティとも関わっていることが、インタビュー調査の回答者より紹介を受けた文書等から読み取れる場合もあった。

大学図書館は大学全体の使命や戦略等を意識して、それに沿うような形で「学士課程学生による研究」に対する支援を実施している。つまり、大学全体のなかで「学士課程学生による研究」に対する支援が行われており、図書館のサービスはそのなかに組み込まれていると言える。

V. 本研究の成果と今後の研究課題

本研究によって、学士課程教育改革の手段の1つとして位置づけられている「学士課程学生による研究」に対する大学図書館の支援に関して、授業内外で実施されているサービスの現況とその実施体制、それらサービスの大学図書館と大学全体における位置づけについて、その一端を明らかにすることができた。第IV章で述べた通り、大学図書館は「学士課程学生による研究」を支援することによって、第2図で示したような学士課程

学生が行う学習活動・研究活動のサイクルを支援している。さらに、それらのサービスは、大学図書館のみならず大学全体の取り組みのなかに位置づけられている。

本研究では、「学士課程学生による研究」に対する大学図書館の支援について、これまでよりも広い観点からの調査を行った。これによって、学士課程教育において大学図書館が果たすべき役割を検討する際の一助となる、上述のような見取り図を提示できたと考えられる。

しかしながら、第I章B節でも述べたように、「学士課程学生による研究」と大学図書館の関係を主眼とする文献は、まだ少ないのが現状である。本研究も含め、大学図書館が実施する「学士課程学生による研究」に対する支援についての研究は、緒についたばかりであり、今後も研究を進展させていく必要がある。

本研究にはいくつかの制約が存在し、今後の研究課題とすべき事柄がある。まず、質問紙調査とインタビュー調査の回答数が少ないということもあり、俯瞰性を高めるためには、さらなる調査を行う必要がある。たとえば、本研究では、北米の研究大学図書館を対象として、「学士課程学生による研究」に対する支援の実態とその特徴を見た。しかし、北米では様々なタイプの大学で、授業内外において「学士課程学生による研究」に対する取り組みが行われている。それを反映して、様々な図書館において「学士課程学生による研究」に対する支援が授業内外で行われている。今後は、本研究で採用した観点に基づき、研究大学図書館以外における現況を考慮に入れた研究を行う必要もあると考える。また、本研究で設定した6つの類型のサービスや調査結果から判明したサービス内容以外にも、「学士課程学生による研究」を支援するためのサービスが行われている可能性は十分にあると言え、今後も調査を継続することで、それらを明らかにできるのではないかと考える。

なお、訪問によるインタビュー調査を行った2館では、書面だけでは汲み取れない部分に関しても話を聞くことができた。たとえば、カリフォルニア大学バークレー校図書館では、インタ

ビュー時に4～5階の改修工事をしていた学部学生用図書館において、学生の学習活動・研究活動を支援するためにグループ学習スペースの拡充、新たなメディアやテクノロジーへの対応を図る予定であるという説明があった。ニューヨーク州立大学バッファロー校図書館では、「学士課程学生による研究」を通して得られる経験は入学希望者へのアピールにもなっている、また、博士号や修士号を目指す学生にとっては「学士課程学生による研究」が準備としての経験になっているという説明があった。今後、さらなる訪問調査を行うことによって、より一層「学士課程学生による研究」に対する支援の特徴を明瞭にできる可能性もあるだろう。

近年では、日本の大学においても、学士課程学生の研究活動を支援するための取り組み⁵⁸⁾⁵⁹⁾が行われるようになってきている。日本の大学図書館でもそれらに対する支援が重視されるようになる可能性もあると考えられるため、今後も先行する北米の大学図書館の動向を注視すべきであろう。

謝 辞

本研究は、2014年度三田図書館・情報学会研究助成を受けたものです。質問紙調査とインタビュー調査にご協力いただいた、北米の研究大学図書館の図書館員の皆様に厚く御礼申し上げます。執筆にあたってご指導いただいた、慶應義塾大学名誉教授の田村俊作先生に感謝いたします。査読者と編集委員の皆様には、本論文を改善するにあたって多くのご教示をいただきました。この場を借りて御礼いたします。

注・引用文献

- 1) Undergraduate research の訳語として、本研究では「学士課程学生による研究」という言葉を使用する。
- 2) 新見慎子. 学士課程学生による研究の促進における大学図書館の役割: カリフォルニア大学パークレー校の事例調査. *Library and Information Science*. 2014, no. 71, p. 51-74.
- 3) Merkel, Carolyn Ash. Undergraduate Research at Six Research Universities: A Pilot Study for

the Association of American Universities. California Institute of Technology, 2001, 60p.

- 4) Hu, Shouping; Scheuch, Kathyrine; Schwartz, Robert; Gayles, Joy Gaston; Li, Shaoqing. *Reinventing Undergraduate Education: Engaging College Students in Research and Creative Activities*. Jossey-Bass, 2008, 103p.
- 5) Jenkins, Alan; Healey, Mick. Undergraduate research and international initiatives to link teaching and research. *CUR Quarterly*. 2010, vol. 30, no. 3, p. 36-42.
- 6) 中井俊樹. 学士課程の学生に研究体験は必要か: 国際的動向と論点整理. *名古屋高等教育研究*. 2011, no. 11, p. 171-190.
- 7) Council on Undergraduate Research. <http://www.cur.org/>, (accessed 2017-03-14).
- 8) The Boyer Commission on Educating Undergraduates in the Research University. *Reinventing Undergraduate Education: A Blueprint for America's Research Universities*. 1998, 46p.
- 9) Merkel, Carolyn Ash. "Undergraduate research at the research universities". *Valuing and Supporting Undergraduate Research*. Kinkead, Joyce ed. Jossey-Bass, 2003, p. 39-53.
- 10) Kuh, George D. *High-Impact Educational Practices*. Association of American Colleges and Universities, 2008, 35p.
- 11) 上記文献¹⁰⁾において、「学士課程学生による研究」以外でKuhがあげている「高い効果のある教育実践」は、以下の通りである。「初年次セミナー」、「統合的・学際的な共通・教養教育」、「ラーニングコミュニティ」、「ライティング重視の授業」、「協働的に取り組む課題やプロジェクト」、「多様性やグローバルな観点からの学び」、「サービスラーニング」、「インターンシップ」、「キャップストーン科目やプロジェクト」。
- 12) National Survey of Student Engagement. <http://nsse.indiana.edu/>, (accessed 2017-03-14). この学生調査は、インディアナ大学中等後教育研究所が運営しているものであり、「学生は学習や教育的活動にどの程度の時間・努力を費やしているのか」「学生に対して、大学は資源の配置やカリキュラム・学習機会の組織化をどの程度行っているのか」という側面に焦点を当てた設問が設けられている。参加大学はアメリカの大学が多数を占めるが、カナダの大学も参加している。
- 13) Gibbs, Graham. "Student engagement, the latest buzzword". *Times Higher Education*. 2014-05-01. <https://www.timeshighereducation.com/news/student-engagement-the-latest-buzzword/2012947>. article, (accessed 2017-03-14).
- 14) Malachowski, Mitchell; Osborn, Jeffrey M.; Ka-

- rुकstis, Kerry K.; Ambos, Elizabeth L. "Realizing student, faculty, and institutional outcomes at scale: Institutionalizing undergraduate research, scholarship, and creative activity within systems and consortia". *Enhancing and Expanding Undergraduate Research: A Systems Approach*. Malachowski, Mitchell; Osborn, Jeffrey M.; Karukstis, Kerry K.; Ambos, Elizabeth L., eds. Jossey-Bass, 2015, p. 3-13.
- 15) 溝上慎一. "授業・授業外学習による学習タイプと能力や知識の変化・大学教育満足度との関連性: 単位制度の実質化を見据えて". *大学教育を科学する: 学生の教育評価の国際比較*. 山田礼子編著. 東信堂, 2009, p. 119-133.
 - 16) "Student Experience in the Research University". Center for Studies in Higher Education at the University of California, Berkeley. <http://www.cshe.berkeley.edu/SERU>, (accessed 2017-06-18). Student Experience in the Research University Survey は、カリフォルニア大学バークレー校高等教育研究センターが中心となって開発した、研究大学に所属する学士課程学生と大学院生に特化した学生調査である。アメリカとカナダの大学における参加資格は、研究大学で構成されるアメリカ大学協会 (Association of American Universities) に所属していることであり、2017年時点では州立大学を中心に28大学が参加している。さらに、アメリカとカナダ以外の研究大学も招待しており、2か国以外では日本を含む21大学が参加している。
 - 17) 齊藤貴浩, 和嶋雄一郎, 廣森聡仁, 安部(小貫)有紀子, 藤井翔太, 前原忠信. 世界的研究大学との協力による学生経験調査の実施と阪大生の特徴に関する考察: Student Experience Survey in Research University への参加と実施. *大阪大学高等教育研究*. 2015, no. 4, p. 1-14.
 - 18) "About CUR". Council on Undergraduate Research. http://www.cur.org/about_cur/, (accessed 2017-03-14). 日本語訳は中井⁶⁾による。
 - 19) Kinkead, Joyce. "Learning through inquiry: An overview of undergraduate research". *Valuing and Supporting Undergraduate Research*. Kinkead, Joyce ed. Jossey-Bass, 2003, p. 5-17.
 - 20) Linn, Marcia C.; Palmer, Erin; Baranger, Anne; Gerard, Elizabeth; Stone, Elisa. Undergraduate research experiences: Impacts and opportunities. *Science*. 2015, vol. 347, no. 6222, 1261757.
 - 21) 中島(渡利)夏子. 米国の研究大学における1990年代以降の学士課程カリキュラムの特徴: 研究に基づく学習を重視するスタンフォード大学の事例から. *東北大学大学院教育学研究科研究年報*. 2008, vol. 57, no. 1, p. 173-189.
 - 22) Hensel, Nancy ed. *Characteristics of Excellence in Undergraduate Research*. Council on Undergraduate Research, 2012, 62p.
 - 23) 「教員と一緒に研究に取り組む」と「最終年次の経験に取り組む」以外の「高い効果のある実践」は、以下の通りである。「ラーニングコミュニティ」(初年次・最終年次), 「サービ斯拉ーニング」(初年次・最終年次), 「インターシップまたはフィールド体験」(最終年次), 「海外留学」(最終年次)。
 - 24) "Summary Tables". National Survey of Student Engagement. http://nsse.indiana.edu/html/summary_tables.cfm, (accessed 2017-03-14).
 - 25) Stamatoplos, Anthony. The role of academic libraries in mentored undergraduate research: A model of engagement in the academic community. *College & Research Libraries*. 2009, vol. 70, no. 3, p. 235-249. インディアナ大学・パデュー大学インディアナポリス校図書館における事例を述べている。
 - 26) Daly, Emily. "Engaging undergraduates in research: Exploring students' research behavior and rewarding outstanding use of library resources". *Student Engagement and the Academic Library*. Snavey, Lianne ed. Libraries Unlimited, 2012, p. 51-61. デューク大学図書館における事例を述べている。
 - 27) Jones, Julie; Canuel, Robin. "Supporting the dissemination of undergraduate research: An emerging role for academic librarians". *Imagine, Innovate, Inspire: Proceedings of the Association of College & Research Libraries Conference*. Mueller, Dawn M., ed. Association of College and Research Libraries, 2013, p. 538-545. マギル大学図書館における事例を主に述べているが、他大学の事例も引用されている。
 - 28) Hayes-Bohanan, Pamela. Librarian mentoring of an undergraduate research project. *Journal of Library Innovation*. 2013, vol. 4, no. 1, p. 21-28. プリッジウォーター州立大学図書館における事例を述べている。
 - 29) Knapp, Jeffrey A.; Rowland, Nicholas J.; Charles, Eric P. Retaining students by embedding librarians into undergraduate research experiences. *Reference Services Review*. 2014, vol. 42, no. 1, p. 129-147. ペンシルベニア州立大学アルトゥーナ校図書館における事例を述べている。
 - 30) Piazza, Lisa M.; Smith, Drew; Pollenz, Richard S. Librarians partner across campus to support undergraduate research. *CUR Quarterly on the Web*. 2016, vol. 36, no. 4, p. 4-9. <http://www.cur.org/download.aspx?id=3269>, (accessed 2017-03-14).

- 31) Hensley, Merinda Kaye; Shreeves, Sarah L.; Davis-Kahl, Stephanie. A survey of library support for formal undergraduate research programs. *College & Research Libraries*. 2014, vol. 75 no. 4, p. 422-441.
- 32) Hensley, Merinda Kaye. A survey of instructional support for undergraduate research programs. *Portal: Libraries and the Academy*. 2015, vol. 15, no. 4, p. 719-746.
- 33) Hensley, Merinda Kaye; Shreeves, Sarah L.; Davis-Kahl, Stephanie. A survey of campus coordinators of undergraduate research programs. *College & Research Libraries*. 2015, vol. 76 no. 7, p. 975-995.
- 34) Hensley らが対象とした取り組みは、「学士課程学生研究プログラム」, 「学士課程学生による研究成果の発表会」, 「学士課程学生の研究論文誌」, 「オナーズ・プログラム」, 「学士課程学生による研究や創造的活動を促進するためのその他の取り組み」である。なお、彼らの調査では、調査対象の大学のタイプを限定していないため、研究大学や教育重視の大学、リベラルアーツカレッジなど様々なタイプの大学が回答している。
- 35) Hensley らの調査³¹⁾によると、有効回答 164 館のうち、「情報リテラシー指導」は 141 館 (86%) で実施されていた。それ以外の支援の実施に関しては、「場所の提供」は 90 館 (54.9%)、「コレクション」は 43 館 (26.2%)、「貸出期間の延長」は 36 館 (22%)、「研究発表ポスターや他の発表物のデザイン」は 29 館 (17.7%)、「研究発表ポスターや他の発表物の印刷」は 32 館 (19.5%)、「学士課程学生の研究論文誌等の出版」は 35 館 (21.3%)、「機関リポジトリ等による研究成果の発信・保存」は 79 館 (48.2%)、「表彰制度」は 49 館 (29.9%)、「その他」は 30 館 (18.3%) という結果であった。
- 36) 2016 年に実施された NSSE のアメリカでの結果によると、「高い効果のある実践」である「教員と一緒に研究に取り組む」と「最終年次の経験に取り組む」に参加予定または経験済みの学生の割合は、研究大学では全体の平均とほぼ同じであるが、リベラルアーツカレッジでは他のタイプの大学と比べてかなり多い²⁴⁾。
- 37) 新見楨子. “アメリカの大学図書館による学士課程学生対象の表彰制度の現状調査”. 三田図書館・情報学会研究大会発表論文集 2012 年度. 東京, 2012-10-6, 三田図書館・情報学会, 2012, p. 29-32.
- 38) “Undergraduate Journals”. Council on Undergraduate Research. http://www.cur.org/resources/students/undergraduate_journals/, (accessed 2017-03-14).
- 39) “List of ARL Members”. Association of Research Libraries. <http://www.arl.org/member-ship/list-of-arl-members>, (accessed 2017-03-14).
- 40) “OCLC Research Library Partnership Roster”. OCLC Research Library Partnership. <http://www.oclc.org/research/partnership/roster.html>, (accessed 2017-03-14).
- 41) 調査当時に使用されていた 2010 年版のカーネギー分類に依拠している。なお、2016 年以降は、以下のウェブサイトで公開されている 2015 年版の分類が適用されている。Carnegie Classification of Institutions of Higher Education. <http://carnegieclassifications.iu.edu/>, (accessed 2017-03-14).
- 42) 授業形式のタイプに関しては、アメリカの大学進学適性試験 (SAT) を運営する非営利機関「カレッジボード」が高校生向けに公開しているサイトを参考にした。College Board. “Quick Guide: Types of College Courses”. Big Future. <https://bigfuture.collegeboard.org/find-colleges/academic-life/quick-guide-types-of-college-courses>, (accessed 2017-03-14).
- 43) Johnson, Anna Marie. Information literacy instruction for an honors program first-year orientation: Lessons learned over 15 years of a sustainable partnership. *Communications in Information Literacy*. 2012, vol. 6, no. 2, p. 141-150.
- 44) 連携先の Undergraduate Research Office は、2017 年現在、Office of Undergraduate Research & Creative Inquiry という名称である。
- 45) メール・インタビューにおいて、以下のタイトルのワークショップを実施しているとの回答があった。「Join the Research Conversation」「Discovering Hidden Resources for Research: Special Collections at OSU」「Keys to Research Success: Keeping Your Data Organized」「Prepare, Present, and Preserve: Moving Your Research Posters from Physical to Digital」。
- 46) Brown, Allison P., ed. *Library Publishing Toolkit*. IDS Project Press, 2013, 380p.
- 47) “University of Toronto Libraries Undergraduate Research Prize”. University of Toronto Libraries. <https://onereach.library.utoronto.ca/undergrad-research-prize/criteria>, (accessed 2017-03-14).
- 48) “Undergraduate Library Research Fellowship”. Ohio State University Libraries. <https://library.osu.edu/news/grants-awards/undergraduate-library-research-fellow/>, (accessed 2017-03-14).
- 49) “Strategic Plan 2013-2018”. University of Toronto Libraries. <http://onereach.library.utoronto.ca/strategic-plan/strategic-plan-2013-2018>, (accessed 2017-03-14).
- 50) 回答者から紹介された当時 (2015 年 4 月) は、上

- 記 URL⁴⁹⁾より当初の戦略計画文書が閲覧できた。
- 51) “The Ohio State University Libraries Strategic Plan 2011-2016”. Ohio State University Libraries. <http://library.osu.edu/documents/strategic-plan/OSU-Libraries-Strategic-Plan-2011-2016.pdf>, (accessed 2017-03-14).
 - 52) University at Buffalo, The State University of New York. “General Education Requirements: The UB Curriculum”. 2016-17 UB Undergraduate Degree & Course Catalog. <http://undergrad-catalog.buffalo.edu/policies/degree/ubcurriculum.html>, (accessed 2017-03-14).
 - 53) “About Princeton: Overview”. Princeton University. <http://www.princeton.edu/main/about/>, (accessed 2017-03-14).
 - 54) “Mission Statement”. Princeton University. <http://www.princeton.edu/main/about/mission/>, (accessed 2017-03-14).
 - 55) “Towards 2030”. University of Toronto. <http://www.towards2030.utoronto.ca/full.html>, (accessed 2017-03-14).
 - 56) “Strategic Plan: The Office of Undergraduate Education, The Ohio State University 2012-2017”. Office of Undergraduate Education—The Ohio State University. http://ugeducation.osu.edu/assets/files/documents/UE_strategic_plan.pdf, (accessed 2017-03-14).
 - 57) 新見 慎子. アメリカの学部学生用図書館のサービスと概念の変遷: 1990年代以降の変化を中心に. *Library and Information Science*. 2011, no. 66, p. 81-126.
 - 58) たとえば, 大阪大学の「学部学生による自主研究奨励事業」といった取り組みがある。“学部学生による自主研究奨励事業”. 大阪大学. http://www.osaka-u.ac.jp/ja/oumode/education_env/ug_jishuken, (入手 2017-03-14).
 - 59) 大阪大学の機関リポジトリでは, 上記プログラム⁵⁸⁾の研究成果報告書を公開している。大阪大学, “平成 27 年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書”. 大阪大学学術情報庫 OUKA. <http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/JISHUKEN/volume/2016.html>, (入手 2017-03-14).

要 旨

【目的】 本研究の目的は, 北米の大学図書館が実施する「学士課程学生による研究」に対する支援の実態とその特徴を明らかにすることである。

【方法】 質問紙調査とインタビュー調査を実施した。質問紙調査の対象は, アメリカとカナダの研究大学図書館 133 館とした。調査対象館の図書館員に対してメールを送付し, ウェブフォーム形式の質問紙への回答を依頼した。調査依頼と質問紙の回収は, 2014 年 10 月から 12 月と 2015 年 3 月に行った。インタビュー調査は, 質問紙調査の回答館のなかで協力を得られた 6 館に対して, 2015 年 3 月から 5 月にかけて実施した。訪問によるインタビューは 2 館, メールによるインタビューは 4 館で実施した。

【結果】 質問紙調査の対象 133 館のうち, 30 館より回答があった。「学士課程学生による研究を促進する授業に対する支援」は全ての回答館, 「オナーズ・プログラムまたはオナーズ学生に対する支援」は 28 館, 「学士課程学生研究プログラムに対する支援」は 19 館, 「学士課程学生による研究成果の発表会への関与」は 16 館, 「学士課程学生の研究論文誌への関与」は 9 館, 「図書館資源を活用した学士課程学生による研究成果の表彰制度の設置」は 14 館で実施されていた。サービスの中心的な担い手は, 人的支援サービスを担当する図書館員やサブジェクトライブラリアン, 学士課程学生に対するサービスを担当する図書館員であった。サービスを実施する際には, 教員との協働が行われることが多く, 「学士課程学生による研究」やオナーズ・プログラム等を管轄する他部署との協働が行われている場合もあった。そして, インタビュー調査の結果より, 「学士課程学生による研究」の促進が大学全体において重要事項の 1 つとして扱われていること, それを意識して大学図書館でも「学士課程学生による研究」に対する支援を重要なものとして認識していることが分かった。